埋葬状況からみた在日ムスリムコミュニティ

樋口　裕二

目　次

はじめに
1、在日ムスリム
（1）歴史
①1980年代以前
②1980年代以後
（2）人口
（3）先行研究・問題の所在
2、在日ムスリムの埋葬地
（1）多磨霊園・外国人墓地区画
（2）イスラーム霊園
（3）神戸市立外国人墓地
3、考察　－在日ムスリムコミュニティ－
（1）オールドカマーとニューカマー
（2）民族的関係
おわりに　－展望－
参考文献

はじめに

在日ムスリムの日本における埋葬（土葬）にまつわる諸問題は特に近年、定住化しつつある新規外国人（ニューカマー）ムスリムたちの間で、早期解決を望むような事態にまで発展してきている。

基本的に日本は土葬をすることが困難[1]であると同時に、イスラームは教義上、「火葬」をタブー視[2]しているためムスリムたちにとって日本は埋葬しやすい国であるとは言えない。しかし、本来は在日ムスリムにとって一様に埋葬が困難であることによって起こっている埋葬問題であるはずだが、何故その中でもニューカマームスリムにとって特に早期解決を望むような事態にまで問題が発展してきているのだろうか。

実際に在日ムスリムが埋葬することが出来る（はずの）墓地・霊園は、日本では多磨霊園（東京都府中市）、イスラーム霊園（山梨県塩山市）、神戸市立外人墓地（兵庫県神戸市）の以上三ヶ所である。但し、どの墓地・霊園も固有の制約や問題があり、全ての在日ムスリムが自由に埋葬することが可能な墓地・霊園は実質、存在していない。そしてそれは同時に、ニューカマームスリムが埋葬可能な墓地・霊園も存在していないことを示している（後述）。

本稿はそのようなニューカマームスリムたちの埋葬をめぐる諸状況を軸に日本における在日ムスリムの埋葬状況を整理し、彼らがもたらした日本のムスリムコミュニティの変化を考察、分析する。

まず第１章、「在日ムスリム」では在日ムスリム自身の定義付けを行う。その際には、オールドカマー・ニューカマーそれぞれのムスリムが日本に定住することになった歴史的な経緯・背景や在日ムスリムの人口構成、先行研究の検討も行う。第２章、「在日ムスリムの埋葬」では日本でムスリムが死亡した際の遺体の取り扱い方法や日本に三ヶ所あるそれぞれのイスラーム埋葬地の現状（特に固有の制約や問題点を中心に）を提示する。第３章、「考察―在日ムスリムコミュニティ―」では、在日ムスリムの日本での埋葬をめぐる諸状況から見えてくる在日ムスリムコミュニティの特徴を提示する。

1、在日ムスリム

彼ら（在日ムスリムの人々）を最も簡単に定義すると「日本に定住または滞在している外国人・日本人のイスラーム教徒」ということになろう。但し、この表現は必ずしも正確だとは言い切れない。なぜなら、「外国人」・「日本人」という表現自体がそもそも明確に定義することができないからだ。例えば、日本国籍をもっていれば「日本人」だとは必ずしも言い切れないし、ましてその逆も当てはまることも明白であるからだ。近年では、在日ムスリムの増加の一要因としてしばしば言及される「外国人」ムスリム（男性）と「日本人」ムスリマ（イスラーム教徒の女性）の結婚による混血児の誕生、そして彼らの増加は「日本人」・「外国人」の境界というようなものをあやうくしている。そのことからもこれらの区分が必ずしも明瞭で正確な分類として機能していないことは明らかであろう。

但し、本稿ではそのような状況を踏まえた上で、議論の都合上あえて「外国人ムスリム＝外国籍を保持しているムスリム」・「日本人ムスリム＝日本国籍を保持しているムスリム」という形で用いることにする。

（1）歴史

①1980年代以前

「イスラームと日本との関係は史料として残っているものの中では『新日本紀』の中で、日本人がムスリムと初めて接触したことを示唆する文章がある。また、19世紀～20世紀にかけて、日本人ムスリムが始めて誕生したとも言われている。しかし、これらの多くは、海外での改宗があくまでも中心である。」[小村 1988：9 - 37] このように日本人とイスラームの接触は意外と古いが、日本国内にイスラームが到来したのは1920年代（大正９年）頃になる。そして、国内に日本人ムスリムが本格的に誕生したのは外国人ムスリムの布教活動によるイスラームブームなどが要因として挙げられる。その直接的な契機になったと言われるのが、日露戦争以後のロシア革命（1917年 大正６年）によって、ソ連から日本にタタール・バシキール人ムスリムたちが

亡命したことにある。当時、日本は国策との兼ね合いからも外国人ムスリムたちとの関係を重視し、優遇していた。なぜなら日本の海外進出の中心となる、諸アジア地域にはムスリムを抱えている国が決して少なくなかったからだ。

そのような背景から、イスラーム関係の研究機関や様々な団体、協会[3]が設立され日本に最初の「回教（イスラーム）ブーム」が訪れた。その「回教ブーム」のさなか、1935年（昭和10年）にはインド系ムスリムたちが中心になって、日本で最初のモスクである神戸モスクを設立した。また1938年（昭和13年）にはタタール・パシキール系ムスリムグループが中心となって東京モスク[4]を設立した。

神戸に貿易関係で来日したインド系ムスリムと亡命という形で来日したタタール・パシキール系ムスリムは、それぞれ日本国内に定住し、結果的にモスクを建設するまでに至った。彼らは日本で生活するにあたって生業をそれぞれ持っていた。神戸で生活していたインド系ムスリムたちは港にまつわる仕事（おもに貿易関係）をしている人々が多かった。タタール・パシキール系ムスリムたちの多くは東京に住み、織物卸や貿易関係によって商いを立て、生活基盤を作っていた[5]。このように外国人ムスリムとして、日本に定住し、生活基盤を確立させていったことを考慮した上で、インド系ムスリムとタタール・パシキール系ムスリムたちはともに、在日ムスリム社会におけるオールドカマーといってもいいだろう。

しかし、敗戦後（1945年 昭和20年）、イスラームブームの際に作られた研究機関、団体や協会はGHQによって一旦解散させられるが、数年のブランクを経た後に、これらの流れをくむ団体、協会の元メンバーが中心となって、再びいくつかの協会や団体が設立された。現在、日本の中でも影響力が大きい二つの団体、日本ムスリム協会（1968年 昭和37年に宗教法人化）やイスラミックセンター・ジャパン（1975年 昭和44年に宗教法人化）もこの一連の流れの中で誕生した。

そして、高度経済成長下においてビジネスとしての中東への注目や各イスラーム国へ留学をする者、オイルショックなどイスラームへの注目が集まっ

た時期もあった。なお、この時期には日本人の改宗者も多数いた。

②1980年代以後

バブル経済といわれた1980年代後半、都市開発や工場労働などの現場では極端な労働力不足にあった。その労働力不足を補う形で、各国より多くの外国人が労働者として来日した。彼らがいわゆるニューカマーといわれる外国人である。本稿で中心的に取り上げる外国人ムスリムたちも、例外なく他のニューカマーたちと同様の過程を経ていた。彼らも労働者として各イスラーム国より来日し、就労していた。しかし、急激に増加した外国人労働者に対して、政府は1989年（平成元年）に『出入国管理及び難民認定法』の改定[6]を行い、実質的な外国人労働者の流入を制限した。しかし、この法改定とは裏腹に、オーバーステイや資格外就労者の滞在人数は減少するどころか、改定以後も一部で増加を続けた[7]。

この状況下において、徐々に彼ら外国人ムスリムの中には長期滞在→定住をする者も現われだした。定住化するためには、ある程度の生活基盤が必要とされるが、外国人同士のネットワークを生かし自身で起業を行ったり、日本国籍を保持する女性と結婚をするなどし、安定した生活基盤を獲得していった。

ニューカマームスリムたちの定住化は日本のムスリム社会に対しても大きな変化をもたらした。代表的な変化としては、大幅な在日ムスリムの全体人口の底上げがあり、現在も増加傾向にある。また、彼らの一部は一定のエリアに集住し、新規のモスクの開設させたりもした。ちなみに、彼らが定住化するまでは、日本で代表的な礼拝所、施設などはほんの数箇所[8]しか存在していなかったが、2004年（平成16年）現在では30ヶ所以上（筆者集計）にも及ぶ礼拝所、施設が首都圏を中心に日本全国に存在している。

（2）人口

そんな在日ムスリムであるが実際に、日本にはどれくらい（の数）のムスリムがいるのであろうか。結論からいえば、それは在日ムスリムの人口を取

り上げた各研究書、記事などによって様々である。最小は１万人～最大は30万人という範囲であった。このように人数にかなりの幅が出ている理由としては、どれも絶対的に根拠となるような統計がないために、どうしても推測の領域を出ないからだと思われる。しかし、その中でも桜井［2003］の、『在留外国人統計』などを元に分析した推計によると、

> そもそもの「日本人」ムスリム人口の実態を把握するような統計がないのはもちろんのこと、多様な在日ムスリムを把握するための「永住者」や「特別永住者」などの区分、ムスリム不法残留者の居住分布や正規滞在者の居住分布や『イスラーム諸国会議機構（ＣＩＵ)』に関係する統計など、すなわち統計上の限界やデータの存在の有無など…。[桜井 2003：29 - 30]

というようなデータ上の限界を示した上で

> 「外国人」ムスリムと「日本人」ムスリムの双方の推計を合わせた７万人あまりが、在日ムスリム人口であり、現時点ではまだ10万人という人数には届いていない。また、「外国人」ムスリムと「日本人」の結婚によって誕生する「在日ムスリム二世」や「日本人」の改宗者の増加が今後予想されているため、10万人に達するのは時間の問題。[桜井 2003：37－38]

としている。ちなみにこれほどまで、在日ムスリムの人口について詳細なデータに基いて言及しているものがないため、現在までこの分析に信用を寄せるほかない。但し、在日ムスリムを取り上げた研究書や記事の多くは、どれも「近年、日本にいるムスリム人口は増加の一途をたどっており、今後も人口は増加していくことが予測される」という趣旨の記述がされている。この記述が示しているように多くの人々が在日ムスリム人口が右肩上がりに増加していることを実感しているのにはほぼ間違いないだろう。

（3）先行研究・問題の所在

そもそも、日本ではイスラーム研究は多いが在日ムスリムを研究したものは数が少ない。これは一見すると矛盾しているかのように思われる。なぜなら、日本人のイスラーム研究者は決して少なくなく、またイスラーム、イスラム、回教自体の研究も決して少なくないからだ 。また、それらの研究成果は優れている場合が多いのは周知の通りである。しかし、それらの研究はイスラーム（教義）そのものの研究やイスラーム国を研究したもの、それらを巡る中東イスラーム国の関係に注目したものが大半を占めるのである。すなわち、イスラームを宗教ないしは中東研究の一部として研究しているものである。それはあくまでも外国社会・文化としてのイスラーム研究であって、日本社会の文化の問題として捉えている研究[9] ではないのである。

そのため、ほんの数年前まで、在日ムスリム研究・記事の多くは、あくまでも週刊誌・雑誌・新聞の紹介ないしは問題提起のレベルにとどまっているものが大半であった。つまり、断片的で、体系的ではなかったのである。そんな在日ムスリム研究であったが、ここ数年間で優れた研究成果が多く発表されつつある。それ以前にも、在日ムスリム（特に、タタール・パシキール人系ムスリム）自身を研究したものや在日ムスリム（日本人ムスリムを含む）の戦前、戦中、戦後の歴史的な役割に注目した研究、ルポルタージュなどはあったが、現在の在日ムスリム社会・文化を考察、分析した研究成果が重点的に発表され始めたのはここ数年である。そして、その研究成果として特に代表的なものを挙げるとすれば「食品」「結婚」「教育」を扱った研究[10]などである。また、在日ムスリム社会・文化の概要を提示した桜井［2003］の研究からも明らかであるように、ニューカマームスリムの定住化によって、大きく変化しつつある在日ムスリム社会の中で近年早期解決を望む自体にまで発展してきている問題が幾つかある。その問題は教育（学校）と本論文で扱う墓地（埋葬）に関する問題である。

在日ムスリムの「埋葬」も、大半の在日ムスリム研究のテーマ同様に記事レベルでの問題提起などが大半である。その少ない研究の中からは以下のことがわかる。

「イスラム教徒のための墓地は全国で幾つかの自治体が管理する限られた外国人墓地の他には、国内にはほとんどない。(中略)…イスラム圏の外国人が事件がらみで急死した場合、日本で埋葬場所を見つけるのは容易ではない。」[木内 近藤 1994：48] また、イスラーム霊園（山梨県塩山市）が（長年の遺体の埋葬によって）満杯になり、最近造成したという現状を示した上で、「外国人ムスリムは本国に送ることもできますが、日本人ムスリムは埋葬地がないというのは大問題です。」[樋口 2001：115] としている。樋口 [2003] は在日ムスリムの遺体の取り扱い方法やイスラーム霊園の運営や関与について整理した上でイスラーム霊園の現状を記述し、「「在日ムスリム」の絶対的な埋葬地不足が明らかになった」[樋口 2003：58] それに加えて「イスラーム霊園をめぐっては「外国人」ムスリムと「日本人」ムスリムの差別化が図られ、そして各地で深刻となりつつある埋葬地不足を解消するべく、新たな埋葬地を確保しようという動きになりつつある」[樋口 2003：57－59] の二点が明らかになった。以上の諸先行研究から日本には、ムスリムが埋葬できるような墓地・霊園が不足している。実質ニューカマームスリムが自由に埋葬できるような墓地・霊園が現在、存在していないということがわかる。

2、在日ムスリムの埋葬地

「イスラームではムスリムが死亡した際にうける最後の審判時に楽園か火獄に分けられる。もしも、楽園に行けずに火獄に落とされた場合には、ただ火に焼かれる。そのことがクルアーンにも記述されているため、ムスリムは非常に火に焼かれるというイメージを恐れている。」[小杉 2002：254] そのため「ムスリムは決して、遺体を火葬することはせずに、遺体を土葬することにしている。これは、民族や地域などは関係なくイスラームを信仰している民族、地域は必ずといっていいほど遵守している。」[清水 1994：69] のである。その埋葬（土葬）へのこだわり、火への畏怖は埋葬に関係する先行研究の中にも確認することができる。(土葬がだめなら焼け、ということになった場合) 日本ムスリム協会の会長（当時）樋口美作氏の答えとして「やっ

ば火は嫌だなあー、火は地獄だからねえー。イスラム教徒にとって…。」[樋口 2003：60 - 61] また、実際にとある外国人ムスリムにインタビューした際に、「ある在日ムスリムのカップル（夫＝外国人、妻＝日本人）が事故にあい、妻のほうが死亡してしまった。その際に、夫が日本で火葬するくらいなら自分の祖国にもって帰って埋葬したほうがといいと主張し、（妻の）家族の反対を押し切って自分の祖国に埋葬してしまった。」ということを聞いた。このような土葬へのこだわりはほんの一例にすぎず、仮にも日常的にムスリムと接触しているのならばこの手の話はきっとよく耳にすることであろう。

このようにムスリムは遺体を必ず土葬する。それを前提に在日ムスリムの埋葬をめぐる諸状況に関して考えていきたい。

在日ムスリムが日本国内で死亡した際の遺体の取り扱い方法は、大まかに二つある。「日本に埋葬する」という手段と「日本国外（外国）に埋葬する」ということである。しかし、これらを容易に選択し、当てはめることができるほど在日ムスリムを取り巻く状況は単純ではない。

まず、日本に住んでいるムスリムは第1章で述べたように、大まかに二種類に分けることができる。日本国籍を所持していない外国人ムスリムと日本国籍を保持しているムスリムである。

但し、日本国籍を保持しているムスリムということで分類するのならば、例えば、外国人ムスリムが日本国籍を保持した日本人女性と結婚をするなどして、日本国籍を取得した場合には、彼ら帰化ムスリムは、日本国籍を保持、取得しているムスリムということになる。また、この帰化ムスリムが仮に日本で死亡した際には、「彼らの出身国に遺体を輸送して埋葬する」(11)、「日本で埋葬する」という二つの選択肢がある。この帰化ムスリムと同様に外国人ムスリムも日本で死亡した際にはこの二つの選択肢があることになる。これら二つタイプに対して、帰化ムスリムなどではない日本人ムスリムは基本的に、「日本国内で埋葬する」という一つの手段しかない(12)。

前述したように、日本に埋葬する場合には東京都府中市の「多磨霊園」、兵庫県神戸市の「神戸市立外国人墓地」、山梨県塩山市の「日本イスラーム

霊園」の3か所がある。次節ではそれぞれの墓地・霊園の歴史的な経緯や現状、制約を詳細に見ていきたい。

（1）多磨霊園・外国人墓地区画（東京都府中市）

多磨霊園自体は1923年（大正12年）に開設された、日本で最初の公園的風景を取り入れた大規模な霊園である。当初は「多磨墓地」という名称でスタートしたが、1935年（昭和10年）、「多磨霊園」と名称が改められ、現在128万m^2（約39万坪）の敷地に、約35万体の遺体が埋葬されている[13]。ムスリムの埋葬地は、外国人墓地区画の一角にある。そこにはトルコ系ムスリムとタタール・パシキール系ムスリム[14]が中心的に埋葬されている。そしてこの埋葬地区画で初めてムスリムの埋葬が1937年（昭和12年）にとり行われた。最初の埋葬もタタール・パシキール系ムスリムであった。また、当時からこの墓地区画にはトルコ系ムスリムとタタール・パシキール系ムスリムが中心に埋葬され、現在でもそれは変わらない。

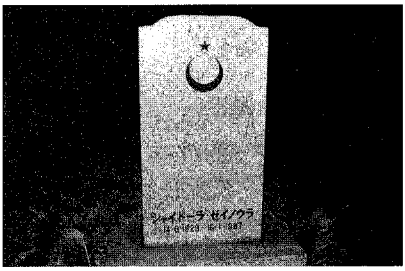
多磨霊園にムスリムのための埋葬地区画が作られたそもそもの発端はタタール・パシキール系ムスリムたちがロシア革命[15]の際に亡命してきたことに由来していると言われている。彼らは亡命によって故郷を失った。そして、当時の政府が最大限考慮した結果として、この埋葬地を確保したのがそもそもの始まりだと言われている。それほど政府が彼らに配慮した背景には、当時、政府（軍部を主に中心として）が、「大東亜共栄圏」に由来する、日本の拡大主義の一環とした政策にムスリム優遇政策[16]があったことが影響したのに違いない。

なお、多磨霊園の外国人墓地区画は、過去に法人（外国人に関係した様々な機関）または個人（外国人）を対象に募集した墓地区画である。今後は新規に外国人のための埋葬スペースを確保し、新たに募集するといった計画は今のところないという[17]。この外国人墓地区画全体としてのスペースも、近年は残り少なくなってきている。

この埋葬地区画は、法人[18]が購入していることからも明白なようにこの場所に埋葬できる人間は自然と限定される。つまり、埋葬することが可能で

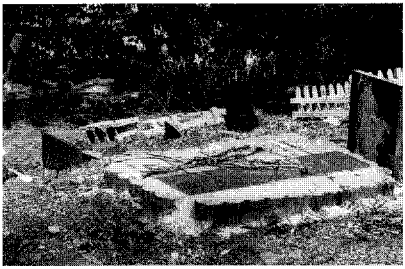
日本のイスラーム埋葬地

多磨霊園外国人墓地区画（東京都府中市）



多磨霊園外国人墓地区画（東京都府中市）

イスラーム霊園（山梨県塩山市）



イスラーム霊園（山梨県塩山市）

あるのは、あくまでも「法人に関係のある人」のみということである。そのため、日本にいる全てのムスリムが埋葬対象ではないのはいうまでもない。

（2）イスラーム霊園（山梨県塩山市）

第二次大戦後、GHQ によって各イスラーム関係の研究機関や団体、協会は解散させられた。その後、一部在野などで研究会が行われていたようだが、日本に表立ったイスラーム団体は存在していなかった。そのような背景の中、終戦から数年後イスラームに改宗した日本人ムスリムの有志を中心に1953年（昭和23年）、日本ムスリム協会は任意団体として設立された。その日本ムスリム協会とムスリム学生協会ジャパン[19] が合同委員会を1961年（昭和36年）に結成し、その委員会の事業の一環としてイスラーム霊園の建設が行われた。様々な紆余曲折[20] を経て1969年（昭和44年）9月3日に山梨県の認可をうけ、9区画2400坪にも及ぶ日本で初めてのムスリム専用墓地が設立された。この合同委員会は1973年（昭和48年）に解散し、このイスラーム霊園は日本ムスリム協会に譲渡され[21] 現在に至っている。

このイスラーム霊園は2000年（平成12年）に新たに100体以上の遺体を埋葬できる埋葬区画を新たに造成した。造成の背景には外国人、日本人ムスリムの埋葬数の増加による埋葬用地不足が主な背景にある。その中でも、イスラーム霊園の管理運営を行っている日本ムスリム協会が埋葬用地を拡大した理由として特に重視しているのが外国人ムスリムと日本人の国際結婚による日本人ムスリム（の子供）の増加と戦前時、オイルショック時に改宗した日本人ムスリムの高齢化にある。つまり、埋葬区画を新たに造成した背景には、日本人ムスリム会員の増加とその会員のための埋葬地を確保することにあったのだ。それは管理、運営していく団体としては当然の決断といえることができる。

但し、イスラーム霊園は「イスラーム圏22カ国全てのムスリムのための霊園」［古屋 1999：355］という名目で当初、開設された。そのため、上記の名目よりも結果的に「日本人ムスリム会員のためのイスラーム霊園」というニュアンスを前面に出すことになった。また「イスラーム圏22カ国全てのム

スリムのための霊園」と名目を変更した理由として日本ムスリム協会側が日本人ムスリムの増加とともに重要視しているのが、「「外国人」ムスリムは亡くなっても母国に埋葬することが可能」ということにある。「近年は、航空運賃の低価格化などの理由から出身国への移送が容易になったことで出身国に埋葬するために移送することが以前よりも増加していることである。そのような背景から、「日本人」ムスリム会員中心の霊園というように方針を転換していっているのだ。」[樋口 2003：56－58] ということも用地を造成した理由の中に含まれている。

が、しかし、露骨に日本人ムスリム会員のみとすることはイスラームの教義上、好ましいとはいえない。もちろん、外国人ムスリムからの反発を招く[22] 恐れもあることから直接的ではなく間接的に、その意志を表明している。その代表的なものが「埋葬費用の高さ」[23] である。もっとも日本人ムスリム会員もイスラーム霊園に埋葬するためには高価な費用を支払わねばならない。そして、日本ムスリム協会の日本人ムスリム会員以外の人がこの霊園に埋葬するためには会員よりも高価な費用を払わなければならないことになっている。すなわち、外国人ムスリムはその会員費用よりもさらに高価な費用を支払わなければならないのである。そのため外国人ムスリムの中にも日本に埋葬を希望する人がいるのだが、高価な費用という問題があることから、日本に埋葬することが困難になっている状況がある。つまり、日本ムスリム協会は、費用のハードルを高く設定することで、会員以外のムスリムを埋葬させることを困難にしている。

（3）神戸市立外国人墓地（兵庫県神戸市）

神戸市立外国人墓地は、数度の移転や災害、第二次大戦などを経た後1961年（昭和36年）10月に墓地が正式に開園した[24]。現在、この墓地には、明治以来日本とかかわりをもった外国人やその日本人妻など約2500人が埋葬されている。面積は約14ha 、慰霊碑等５基、埋葬国数56ヶ国、宗教数20余だと言われている。

神戸とムスリムとの関わりについて、前述のように日本で最初に神戸モス

クが1935年（昭和10年）に建設された経緯がある。その時、インド系ムスリムが中心になってモスクは建設された。神戸は当時西日本最大にして唯一の国際商港であったため、外国人が多く、外国人ムスリムも多かった。そのため、神戸に居住していた多くの外国人ムスリムは、死亡した際にここ神戸市立外国人墓地に埋葬されている。但し、もちろんこの墓地も他の埋葬地同様、費用さえ負担すれば埋葬が可能だというわけではないのである。

『神戸市立外国人墓地条例』の第２条の（使用者の資格）を見る限りでは

墓地を使用するものは、居留外国人でなければならない。ただし、市長においてやむを得ない事情があると認めたときにはこの限りではない。
［神戸市立外国人墓地条例］
［http://www.city.kobe.jp/cityoffice/09/010/reiki/honbun］

とされている。外国人の定義によっても異なってくるのだが、過去の事例などを考慮する限り、外国人とその家族に対しては埋葬を認めているようだ。すなわち、神戸市立外国人墓地に埋葬が可能である人々は神戸市に居住している外国人（とその家族）、神戸になんらかの形で貢献し、市長に埋葬が許可された外国人（とその家族）に限定されているということになるのであろう。一部の例外を除いて、神戸に居住していない外国人、外国人ムスリムはもちろん当然のことながら埋葬の対象外であるし、もちろん彼らと関わりのないような多くの日本人ムスリムたちも同じように、この墓地の埋葬資格がないのである。

３、考察　ー在日ムスリムコミュニティーー

前述のように、全ての在日ムスリムが埋葬可能な墓地・霊園が存在していないことがわかった。それは実質、ニューカマームスリムが自由に埋葬できる場所が現在の埋葬地には存在していなかったということである。そのような状況を受けて、自分達（ニューカマームスリムがコミュニティを形成し）

が埋葬可能な土地を確保しようとしている動きも一部で活発化しつつある[25]。

在日ムスリムの埋葬地問題からもわかるように、一言で在日ムスリムといっても多様であり、彼らが一体となっているということは必ずしも言い切れない。またそもそも、イスラームという核があるから、連帯しているといったようなイメージを抱きがちであるが、そのような単純なモノでは決してない。在日ムスリムの場合には連帯というよりも様々なファクターによってコミュニティが分かれているほうがむしろ多い。そのファクターというのが、各団体の設立に関する歴史の長短や外国人ムスリムの来日時期や滞在期間、出身国（国籍）などである。本章では、そのファクターの内、オールドカマーとニューカマーという外国人ムスリムのそれぞれのより詳細な概要と日本人も含めた出身国（国籍）の特徴に注目し、言及していく。

（1）オールドカマーとニューカマー

まず、外国人ムスリムに関して言及するのならば、前述の埋葬地にまつわる諸事情からもわかるように、オールドカマーとニューカマーという存在がある。ここでいう、オールドカマーとは神戸に住んでいたインド系ムスリムや東京などの首都圏に居住していたタタール・パシキール系、トルコ系ムスリムのことである。それに対して、ニューカマームスリムとは1980年代後半に労働者として、来日し定住化した外国人たちである。代表的な国をいくつか挙げるとすれば、パキスタン、バングラデシュ、インドネシアなどの人々である。本節はこれら二つの大きな存在の近年の傾向を提示し、比較していく。

この二つのコミュニティに関してまず、明確な差を挙げるとするならば、在住期間（長・短）の差による生活基盤の差といったものがあげられる。オールドカマーとして来日した人々の中には既に、２世や３世といった子孫が誕生し、引き続き日本に滞在していたりするケースも多い。ここまで長期に在住した場合、もはや、生活基盤の安定化というレヴェルだけでは言及しきれない、生活していくための様々な資本蓄積が確立しているように思われる。

その典型的な存在としてあげられるのが埋葬地なのかもしれない。それに対して、(時代背景なども異なるため一概に比較することは困難であるが) ニューカマームスリムは、オールドカマームスリムとは、約50年以上もの時間の差が存在している。もしも、外国人の定住化における段階的な過程が存在しているとするのならば、彼らが近年ある程度の生活基盤を安定化させ定住化が進んでいる、といってもネットワークや日本での生活蓄積などはオールドカマーと比較した場合には及ばない部分がまだまだ多いのは当然であろう。

また、この二つのコミュニティの違いは職業と居住地域にもある。大まかな傾向として、戦前に来日したタタール・パシキール系ムスリムたちは、都市部に定住し、「織物・繊維の貿易を中心に商い」[鴨澤 1982]をしていた。神戸のインド系ムスリムたちは貿易に従事していた。オールドカマーのそのような傾向は現在までも大よそ変化していない。それに対して、ニューカマーは都心部よりも郊外に住み (場所によっては集住しているエリア[26] もある)、中古車販売・貿易・工場労働に従事していることなどがあげられる。この二つのコミュニティは少なくとも職業、居住地域では交流するような機会は決して多いとはいえないのだろう。

なぜなら本来は同宗教同士の交流の場であるはずのモスクなどの宗教施設もオールドカマーとニューカマーにはそれぞれ一定の傾向があり、交流が少ないからだ。そのため、ただ単純にモスクに行き、彼らが積極的に交流しあうような状況は決して多くはない。多くのオールドカマーは新規に建設されたモスクなどの宗教施設よりも、オールドモスク、いわゆる神戸モスクや東京モスクなどに行く機会が多いようだ。もちろん、新規に建立されたモスクに行くような場合もあるが、その際には勉強会やイベント (行事) などが開催される時に行く場合である。しかし、ニューカマームスリムによって、近年建設され、運営されているモスクなどには、一部の例外[27] を除いて、オールドカマームスリムが積極的に行くようには思われない。ニューカマームスリムの多くは居住エリアにもよるが、自分達の作ったモスクに行く場合が多い。また、彼らもイベントによっては、比較的に自由に行き来していることもある。但し、留意すべき点は、(オールドカマーとニューカマーの両方を

含めて）誰が○○モスクに所属しているといったことは一切ないことだ。形式上はそれらの場所は誰にでも開かれている。しかし、自分の好みや出身地域（後述）、そのような要因をも含めた“居心地の良さ”などの要素によって決まるのである。

つまり、オールドカマーとニューカマー、それぞれのムスリム同士を様々な要素から比較した傾向としては、彼らが交流し、なおかつつながりを持つようなキッカケは決して多いとはいえないのである。

（2）民族的関係

埋葬地の問題に関して、日本人ムスリム達（日本ムスリム協会）は様々な理由があるにしろ、イスラームという宗教的要素よりも、日本人といったエスニックな面を前面に押し出した。このように、いくらイスラームとはいえどもやはり同じ出身国の人々とは連帯感を持つことが多いのは、（オールドカマーとニューカマーの両方を含めて）外国人ムスリムも同じである。それは元々のイスラーム自体の地域性もあるだろう。また、特に外国人ムスリムにとっては、自分達の力になってくれるような組織である在日○○人協会や大使館などの存在も大きいのであろう。そして、なによりもその組織の存在によって集まってくる同じ祖国の人々の影響力は大きい。

その他にも在日ムスリムは、同じ宗教という連帯性以前に“国”という存在をも意識している。あるニューカマームスリムが「あのモスクは○◇（国名がはいる）系だから、あんまり行きたくない。」ということを口にしたのを聞いたことがあった。モスク自体、イニシャチブを握る人々によって、国の地域性などがでるのは当然かもしれない。またそれが、その国の人たちをひきつける大きな要因の一つになっているのは確かなのであろう。また、「▲◇モスクはサウジアラビア系」とか、「×◇モスクはパキスタン系である」というように分類することが可能であるのも“国”の存在が大きく前面に出て、影響を与えているのにほかならないのであろう。

おわりに　ー展望ー

ニューカマームスリムたちがもたらした、日本のムスリムコミュニティの変化、特に埋葬をめぐる諸状況について考察、分析した。その結果、彼らの流入→定住化によって曖昧になってきた日本のムスリム社会に対して、私達はイスラームという核があるから連帯しているといったようなイメージを抱きがちであったが、それはそのような単純なものでは決してなく、外国人ムスリムの来日経緯や滞在期間、出身国（国籍）などの各要素の違いによって実はくっきり分かれてしまうような関係があることがわかった。このことから在日ムスリムが埋葬可能であるはずの墓地、霊園が日本で３か所存在しているのにもかかわらず、ニューカマームスリムが埋葬可能な墓地、霊園は存在していなかった。そのため、彼らが在日ムスリムの中でも特に埋葬地不足の問題に対して早期の解決を望んでいる存在だということがわかった。

それはつまり、在日ムスリム同士の横の連帯は意外とあるようで存在していない、また、仮にあったとしても希薄であると思われる。

ここではそのことをよくあらわしたエピソードを紹介したい。私自身があるイスラーム組織の古株の幹部男性（日本人）と会話していた時に、「みんな、ムスリム同士ももっと協力しあえば、スムーズに色々なことが運ぶのにねえ。だって、今日もハラール食品のことで電話がかかってきたけど、上はすぐに、名古屋モスクに転送しちゃえっていうんだよね。大して用件も聞かずにね。変な住み分けっていうかねえ、こんなのができているんだよ。これってまずいよねえー。」と言っていた。また、ある時は日本人ムスリマがポロっと、「一部の外国人と若い日本人ムスリムはムスリム同士の横のつながりがないことにある種の危機感を抱いてますよねえ。 私も、ムスリマになって、こんなに関係が少ない？ ない？ なんて知らなかったですよー。ムスリム同士って本来もっと助けあうべきですよー。」と、こぼしていた。ある外国人ムスリムは「ただでさえ、少ないのにますます、孤立しちゃうよ。まったく、どうすればいいのかなあー。」といっていた。実際にこのような状態に対して、危機感を抱いている人々もいる。但し、中にはムスリム同士の繋がり自

体を決してといいものとは思っていない人もいる。そのようなつながりを避けるために自分達があえて、独立した形でモスクを建設して運営している場合もある。そのニューカマームスリムの心情を桜井［2003］は“居心地の悪さ”という表現を用いて記述している。

> しかしながら、労働を目的に来日したムスリムたちは、関東を中心に全国に散らばっていることから、これらのモスクやムッサラーを日常的に利用することは不可能であったし、特定の大使館と繋がっているモスクは、そうした人々にとって必ずしも居心地のよいものではなかった。［桜井 2003：106］

これを見てみるとそのつながりが在日ムスリムにとって良いことであるのか悪いことであるのかは意見の分かれるところである。

但し、在日ムスリムの歴史的な側面に注目してみると、かえって分裂している歴史が当たり前なのである。そのような在日ムスリム同士の分裂の歴史は「1930年代のアヤス・イスハキとクルバン・アリーの対立」［小村 1983：305－328］にはじまり、また、最近では東京モスクの建て替えに際して、1987年に政界ジャーナルで『勃発した“東京イスラム聖戦”－モスク建設で在日イスラム教徒間の対立激化』として紹介された。

> 東京モスク（筆者注：一応、書類上の所有者はトルコ大使館）の建て替えをめぐって、モスクとトルコ文化センターをいっしょに建設しようとするトルコ共和国側と東京モスクが日本のムスリム全ての共有のものという考えのもと、文化センターなしの純粋なモスクの建設を望むパキスタン、マレーシアなどの一部ムスリムの対立。［政界ジャーナル 1987］

このような例もある。つまり、分裂しているような在日ムスリムの現状は今にはじまったことではない。元々、在日ムスリム自体、一枚岩ではない。利害関係が一致しているわけではないのだから、分かれているのはむしろ当然

なのである。

しかし、その中でもサルマン・ラシュディーの『悪魔の詩』翻訳[28]への抗議、デモ運動や富山のコーラン破り捨て事件[29]の際のムスリム同士の連帯と全国的な抗議展開は極めて異例であった。やはり、なんらかの機会でイスラームによってムスリム同士が連帯していくような場合は存在している。近い将来、そのような機会はあるのだろうか。それはムスリムとしての権利（＝市民権）の要求としての場としてなのであろうか。どちらにしろ、今後も彼らの動きには注目していかなければならない。

なお、課題として今回は日本国内での在日ムスリムアウトラインに限定して言及してきたが、外国人ムスリムという性格上、日本国内にとどまらず、諸イスラーム国の国内状況などをより詳細に分析するのはもちろん、“イスラーム”という潮流に関わっていくことは同時に世界的なムスリムの傾向にも注意を払うことになる。そして、今後はそれらにも言及しつつ、調査を進めていかなければならないであろう。

参考文献

浅香勝輔・八木澤壮一

1983『火葬場』大明堂。

伊豫谷登士翁

1994「バックドアからサイドドアへ、そして―日本の外国人労働者政策の転換に向けて」『世界』岩波書店1994年６月（596)、153－161頁。

イブラヒム、アブデュルレシト（小松香織＋小松久男（訳））

1991『ジャポンヤ』第三書館。

稲賀繁美

2002「ラシュディー事件」大塚ほか（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店、1038頁。

江淵一公

2000『文化人類学―伝統と現代―』放送大学教育振興会。

王建新

2002「日本の外国人ムスリム」『アジア遊学』勉誠出版（39)、137－147頁。

大谷裕文
2002「トランスナショナリズム」綾部（編）『文化人類学最新術語100』弘文堂、134－135頁。
奥平康弘
1987「「葬法」管見―「土葬禁止」の神話をめぐって」『法学セミナー』日本評論社 1987年4月号（388）、10－13頁。
小村不二男
1988『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟。片倉もとこ
仙波友里
2003「多民族共生社会としての日本を考える―在日ムスリムに対する日本政府、地方公共団体、民間の対応―」『総合政策研究』中央大学総合政策学部（10）、209－224頁。
鴨澤　巌
1982「在日タタール人についての記録（一）」『法政大学文学部紀要』法政大学文学部（28）、27－56頁。1983「在日タタール人についての記録（二）」『法政大学文学部紀要』法政大学文学部（29）、223－302頁。
木内　宏・近藤悦郎
1994「異邦人が眠る墓」『AERA』朝日新聞社1994年3月7日号（7－9）、48－51頁。
工藤正子
2000「パキスタン人ムスリムの妻になった日本人女性の家族形成―双方の親族への相互訪問から構築されていく現代日本の異文化家族」『旅の文化研究所研究報告』旅の文化研究所（編）（9）、109－121頁。
小杉　泰
2002「火獄」大塚ほか（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店、254頁。
駒井　洋
1994「段階的市民権を提唱する―在日イラン人への調査を踏まえて」『世界』岩波書店 1994年6月（596）、122－133頁。1999「日本の中のイスラム教徒（公開シンポジウム「西ヨーロッパの中のイスラーム教徒」）」『イスラム世界』日本イスラム協会（52）、64－68頁。
後藤朱美
1993「ムスリムは土葬を行うが彼らは日本でも土葬ができるのか」『アッサラーム』イスラミックセンター・ジャパン 1993年10月号（58）、46－50頁。

桜井啓子

1998「関東近郊のモスクを訪ねて：在日ムスリムコミュニティ」『ＰＲＩＭＥ』明治学院大学国際平和研究所（8)、51－60頁。2003『日本のムスリム社会』（ちくま新書420）筑摩書房。

ＳＭ．サマライ

1997『日本におけるイスラーム普及の歴史と発展』イスラミックセンター・ジャパン。

清水芳見

1995「アラブ・ムスリム社会の墓制―ヨルダンの事例―」『沙漠研究』日本沙漠学会（4)、69－80頁。

2001「現代日本社会とイスラーム―日本社会におけるムスリムの現状」第17回中央大学学術シンポジウム研究業書委員会（編）『日本型企業の行方 中央大学学術シンポジウム研究業書 2』中央大学出版部。

2003『イスラームを知ろう』（岩波ジュニア新書 430）岩波書店。

杉本均

2002「イスラーム教徒における社会文化空間と教育問題」宮島ほか（編）『国際社会２　変容する日本社会と文化』東京大学出版会、145－167頁。

仙波友里

2002「多民族共生社会に関する一考察―埼玉在住ムスリムの事例を中心に―」『大学院研究年報―総合政策研究科（編)』中央大学（5)、271－275頁。

高橋里佳

2003 「多文化化する日本―ハラールショップの実態から―」上杉（編）『多文化化としての日本―ムスリムの生活世界の調査から―』成城大学文芸学部文化史学科、29－46頁。

田澤拓也

1998『ムスリム・ニッポン』小学館。

2000「「在日回教徒」の八十年」『世界』岩波書店 2000年9月号（679)、114－119頁。

竹内修子

2000 「外国人ムスリムと日本人女性の結婚」『ソシオロジ』社会学研究会（45－2)、55－68頁。

2001「日本人妻のイスラームへの適応」『愛知学院大学教養部紀要』愛知学院大学教養教育研究会（48－3)、157－172 頁。「特集 ニッポン移民列島」

2004『週刊ダイヤモンド』週刊ダイヤモンド社2004年6月5日（92－22)、28－41頁。

樋口美作

2001 「誌上説法」『総合雑誌SOGI』表現文化社（64－4)、115頁。

樋口裕二

2003 「日本のイスラーム霊園―ムスリムの埋葬事情を中心に―」上杉富之（編）『多文化化としての日本―ムスリムの生活世界の調査から―』成城大学文芸学部文化史学科、47－62頁。

深町宏樹

1990「日本のパキスタン人労働者問題（外国人流入問題と地域〈特集〉)」『地域開発』日本地域開発センター（307)、28－32頁。

藤井正雄　長谷川正浩（編）

2001『Q＆A墓地・納骨堂をめぐる法律実務』新日本法規。

古屋正明

1998『信仰体験記 細事録』宇宙山絶太社。「勃発した“東京イスラム聖戦”モスク建設で在日イスラム教徒間の対立激化」1987『政界ジャーナル＝The political world』(20－10)、76－78頁。

松長　昭

1999「第七章 アヤス・イスハキと極東タタール人コミュニティー」池井 坂本（編著）『近代日本とトルコ世界』到草書房、220－263頁。

ウェブサイト上のホームページ

「神戸市立外国人墓地条例」(2003年12月5日)

http://www.city.kobe.jp/cityoffice/09/010/reiki/honbun/k3020625001.html

「神戸市立外国人墓地条例規則」(2003年12月5日)

http://www.city.kobe.jp/cityoffice/09/010/reiki/honbun/k3020624001.html

「神戸市立外国人墓地の歴史」(2003年12月19日)

http://www5b.biglobe.ne.jp/~aru1206/hutatabi1.htm19

註

（1）『墓地、埋葬等に関する法律』によると、法律上では『土葬』も『火葬』もほぼ同等の扱いを受けている。しかし、それでも日本で埋葬（土葬）をすることが事実上少ない理由として、地方公共団体等が「条例」で「土葬」を全面的に

禁止する（点線筆者註）ようなことは「墓地、埋葬等に関する法律」の存在によって不可能である。しかし、「条例」がその「法律の範囲内」で、ほぼ禁止に近いような規制、制限を行うことは可能であり、日本ではそれが特に公衆衛生という側面を強調した形で行われている［奥平 1987：10－13］。

（2）第2章参照。

（3）「大日本回教協会」や「西北事情研究所」、「東亜研究所」、「回教圏研究所」など。詳細は小村［1988］を参照。

（4）1938年（昭和13年）に建設された東京モスクは初代のモスクである。このモスクは老朽化などにより1986年（昭和61年）に取り壊された。現在あるモスクは2000年（平成12年）に再建されたものである。

（5）詳細は鴨澤［1982－1983］を参照。

（6）主な入管法の改定主旨は、在留資格の拡大と明示、審査手続きの簡素化、不法就労の取り締まり強化などが挙げられる。外国人ムスリムへの影響として代表的なものは以下の通りである。「80年代後半から増え続けていたパキスタン人、バングラディシュ人の不法就労を抑制するため、1989年に査証免除取り決めの一時停止措置をきっかけにこの二国からの渡航者は激減した。また、この二国のほかにも、イランからの渡航者も増加していたが、日本国内の1992年の査証免除取り決めの一時停止措置などをきっかけに前の二つの国と同じように、渡航者は激減した。」［桜井 2003：26 - 27］

（7）特にここで注目することは、外国人労働者としての規定の変更によって、日系人労働者が急増するといったことがおこった。正当な定住者となった彼らは、他の外国人労働者にとってかわることも多かった。そのような動き以外にもインドネシアからの入国者は『入管法』改正以後も「研修生」や「技能実習生」として来日する者が増加した。

（8）神戸モスク、東京モスク、イスラミックセンター・ジャパン、日本ムスリム協会、アラブイスラムインスティテュートなどが挙げられる。

（9）但し、『イスラーム研究』の歴史的な側面に注目して、日本の大東亜共栄圏政策などを背景とした侵略としての『イスラーム』研究や大日本回教協会などと現在の『イスラーム研究』とは一線を課すべきなのかは、『イスラーム研究者』の中でも揺れている。」［臼杵 2002：194 - 195］というような意見もある。

（10）代表的な研究をいくつか挙げるとすれば、まず「食品」はムスリムが食することのできる食品、「ハラール食品 」を扱うハラールショップの日本での展開やハラールフードの調達方法などに関する研究がある。［樋口 丹野 樋口1998］

[樋口 丹野1999 2000]「結婚」は外国人ムスリムと日本人女性の国際結婚に関する研究がある。[竹下2000 2001]「教育」は日本におけるイスラーム教徒の教育問題と実践に関する研究がある。[杉本 2003] 最後に、これまでの在日ムスリム研究の全容を把握するのとともに、日本社会で生活する在日ムスリム社会の生活・文化の全般を明示した研究。[桜井 2003] 以上が近年の在日ムスリムの生活に関する代表的な研究である。

(11) 外国人ムスリムが死亡し、本国に移送し埋葬する際に、出身国によっては国からの補助金があったりもする。それは各国ごとに異なる。その補助金の金額に左右されることも多い。また、フランスのマグレブムスリムコミュニティなどに見られるような祖国に埋葬するための費用を集める「無尽講」のようなモノも一部の外国人ムスリムコミュニティに見られる。一部、樋口 [2003] を参照。

(12) 但しこの場合にも、外国人ムスリムを夫に持つ日本人ムスリマなどは形式上、夫の出身国に埋葬することも可能であるが、多くの日本人ムスリム同士のカップルもしくは未婚の日本人ムスリムなどは「日本国内で埋葬する」という形の埋葬パターンしかない。

(13) 多磨霊園は東京都府中市にある。本来は東京都条例によって、埋葬（土葬）は禁止されている「市」であるが、多磨霊園で埋葬（土葬）することは宗教的な例外として許可している。埋葬（土葬）に関しては東京都が管理している谷中霊園にもロシア正教の墓地があり、この場所も宗教的な例外として埋葬（土葬）を許可している。（インタビュー：2001年 9 月財団法人 東京都公園協会 多磨霊園の管理担当者より）

(14) トルコ系以外と思われる人々（中には中国人や日本人と思われる人々も）が中心に埋葬されている。この墓地区画に埋葬されている人々の大半はトルコ系もしくはタタール・バシキール系ムスリムが中心である。また、トルコ系ムスリムとタタール・バシキール系ムスリムとの関係について、「彼ら（タタール・バシキール系ムスリム）が亡命した際にソ連国籍を取得した者もいたが、トルコ国籍を多くの者が取得した。」[鴨澤 1981] という記述がある。それ以来、この二つの民族は密な関係にあるようだ。

(15) ロシア革命時のロシア正教以外の宗教弾圧を示す。ここではイスラームの弾圧を指す。

(16) 例えば、それはアブドゥルラシッド・イブラヒームに関するエピソードからもよくわかる。「彼は、タタール人で東京モスクの初代イマームとなった人物である。軍部との関係も深く、戦前戦中と日本におけるイスラームの布教に活躍

した人物であった。1944年（昭和19年）に亡くなり、イスラーム的葬式の後、多磨霊園に埋葬された。軍部とイスラーム各団体（東京イスラーム教団、大日本回教教団など）とのつながりが深かったことは、埋葬に関する一切の費用等は全て軍部が負担していることからもよくわかる。」［田沢 1998：164］また、イブラヒーム自身に関しては、［イブラヒーム 1991］を参照。

(17) インタビュー：2001年9月財団法人 東京都公園協会 多磨霊園の管理担当者より。

(18) ここでは在日トルコ人協会、トルコ大使館を示す。

(19) 現在のイスラミックセンター・ジャパン（ICJ）の前身で、「日本に留学に来ていた各イスラーム諸国のムスリム学生を中心に形成され1961年に設立された。」［サマライ 1999：8 - 9］

(20) ここでの紆余曲折とは霊園建設時における地元住民からの霊園建設反対のことである。イスラーム霊園は山の斜面の最上部にあり、周りには多数の果樹園に囲まれている。そのような背景を考慮した場合に、住民にとっては農業へのなんらかの影響を心配した上での行動であった。しかし、結果的にはこの反対運動などを克服しての霊園建設であった。詳細は古屋［1998］を参照。なお、イスラーム霊園建設の直接的な契機になったのが、サーディク今泉の死去によって、日本でのムスリム埋葬地がないことが明らかになったことによるという説。また、将来的に留学生の増加のための埋葬地不足への考慮。インドネシアの高官の子供の死去にともない土葬ができず、火葬処理しかできなかったことなどが契機として考えられる。

(21) この主張に関して、日本ムスリム協会側とイスラミックセンター・ジャパンとの間には差がある。日本ムスリム協会側は譲渡したと主張するのに対して、イスラミックセンター・ジャパン側は奪われた、だまされたと主張する。これらの主張のミゾは今後、さらに調査していく必要がある。

(22) 現に、一部では反発を招いているようで、埋葬地を確保しようとしている、ある外国人ムスリムグループの代表にインタビューをした際に『彼ら（日本ムスリム協会）が外国人ムスリムを差別しているから、ぼくたちは誰でも埋葬することが可能な埋葬地を確保する』と主張していた。

(23) 詳細な料金に関しては、樋口［2003］を参照。但し、筆者自身が日本ムスリム協会の正会員ではないため、より正確な料金は確認しきれていない。

(24) なお、どのようないきさつかは不明だが、春日野墓地移転にあたっては28基の墓が神戸ではなく横浜などに移されている。

(25) あるパキスタン系ムスリムのグループは千葉県D町に埋葬地を確保しようとするも、書類不備や反対運動などによって失敗に終っている。その後も千葉県で再度、埋葬地を探しているものの現在まで埋葬地確保までには至っていない。また、東海地方に定住しているあるニューカマームスリムたちも岐阜県などに埋葬地を探しているものの、確保するまでにはいたっていない。それ以外にもこれはニューカマームスリムではないが、沖縄県に住むムスリムたちが埋葬地を近隣の島に確保しようとするも同じように失敗に終っている。このように全国的に埋葬地を確保しようとする動きは徐々に活発化している。

(26) 日本でも「ムスリム銀座」などといわれている東武伊勢崎線沿線の地域（群馬県伊勢崎市・伊勢崎モスク。埼玉県春日部市・一ノ割モスク）や東武伊勢崎線の境町モスクなどの集住するエリアに存在している。しかし、その他の新規のモスクである、成増、お花茶屋、行徳、八潮、浅草、大塚、八王子、海老名、日向などは必ずしも、集住した地域のモスクとはいいきれない場所に建っている。但し、このようなモスクがなくても集住しているような愛知県名古屋市中区の通称、ムスリムタウンと呼ばれているような場所もあり、その集住形態は少ないなりにも多様である。また、集住するエリアが存在していることは事実であるが、集住しているケースはニューカマームスリムの一部に限定される。その他のムスリムのほとんどは拡散して生活している。

(27) 例えば、イスラミックセンター・ジャパンと八王子モスクのように、出資先が同じ（サウジアラビア）兄弟関係などである場合には情報交換、交流はある。

(28) 稲賀［2002］を参照。特に、90年の在日パキスタン人協会による出版反対デモは大きな影響を与えた。

(29) 2001年５月21日、富山県小杉町白石の国道八号線沿いにあるパキスタン人経営の中古自動車販売店前に切り刻まれたコーランが散乱していた事件。全国のムスリムが抗議行動を起こした。結局は28歳の女性が父親を困らせようとして起こした事件であることが判明し、女性は警察に逮捕された。